Native American の文学：N. Scott Momaday の *House Made of Dawn*

岩 山 太 次 郎

I

Native American はアメリカ文学に古くから登場してきたが，白人作家が native American を描く場合には，彼らを「野蛮人」(savage) として描くか，さもなければ，「美化」して描いてきた。[1] そして，特に「美化」して描く場合は，native American の中に，白人にはない要素を発見し，彼らを自分たちの社会に必要なものを提供してくれるものとみている。したがって彼らに native American としてのアイデンティティを認めているのではなく，自分たち白人と同じ人間とみなさないか，あるいは，自分たちにはない「貴重な人間性」とか「貴重な人間像」を発見するといった白人側からの native American 観にもとづいていた。

最近の白人作家が native American を描いているアメリカ小説をみると，白人の方からより積極的に native American の文化を身につけようとしたり，native American のもつプリミティヴなものに行詰った白人の現代社会の活路を見出そうとする傾向がみられる。John Barth の *The Sot-Weed Factor* (1960) では，あらゆるものを認めるという立場から native American も認められるし，Ken Kesey の *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (1962) には自由をとりもどす人物として native American の Big Chief がいるし，*Sometimes a Great Notion* (1964) にも，また Leonard Cohen の *Beautiful Loser* (1970) にも，native American の文化がもつプリミティヴなものへ

の復帰がみられる。[2]

しかし，これら最近の白人の書いた作品の中での native American でも，白人側からみた native American であって，そこには潜在的に，白人社会が文明社会であり，native American の社会は非文明社会であるという前提が働いている。したがって，たとえ native American を「野蛮」と思わなくて，native American やその文化の中に「美しいもの」や「永遠の真につながるもの」を発見している場合でも，彼らは白人と共存しうるものであるとか，あるいは，白人が native American のプリミティヴなものに復帰することにより自分たちには欠けている何かが得られるという，白人側からの観点がうかがえる。

ところが，native American 自身の手による作品は，白人作家が描いてきたような native American は殆んどみあたらない。最近の native American の文学には，白人が彼らを白人文化の中で共存できるものと考えたり，彼らのプリミティヴな文明の中に「真なるもの」を発見することを，必ずしも観迎していないことがうかがえる。それどころか，native American の文学には，白人との共存すら拒否しようとする態度がみられる。なぜなら，native American の側からみれば，共存は白人文化への同化や埋没を意味し，それは自己の存在否定にもつながるからである。それよりか，native American はなんとかして自己固有の文化・伝統の中で生きることによって，自己の存在を確立しようとしているようである。最近の Red Power Movement もこの現われであると言えよう。

II

Native American の最近の文学といっても，数においては未だ決して多くはない。古くからの彼らの口承文学にみられたように，詩が数的には大半を占めているし，ノン・フィクションはかなりあっても，小説は数えるほどしかない。

元々，native American[3] は，いわゆる文字を持たないものたちであった[4]ので，彼らの文学は口承伝統から生れてきたものであったが，すでに18世紀後半には，白人が彼らの口承伝統や歌を記述したり翻訳したりしたが，後には native American 自身も白人の言語で，自分たちの歴史を記しはじめている。そして，20世紀になると，英語が彼らの文学創作のメディアとして定着してきた。

Native American 自身が書いたものを見ると，まず第一に気付くことは，彼らは言葉をいつも崇敬と畏敬の念をもって使用し，それによって賛歌や歌謡の形で美を創造しようとしていることである。N. Scott Momaday (1934—) は，言葉に対する native American の基本的な考えを，native American の老婦人を描写するときに，述べている：

> ...for her words were medicine ; they were magic and invisible. They came from nothing into sound and meaning. They were beyond price ; they could neither be bought nor sold. And she never threw words away.[5]

言葉に対する native American の態度には，彼らをとりまいている世界に関する哲学の延長物として言葉を考え，自然の美を空しく浪費したり，破壊するためではなく，尊敬するために言葉はあったと考えているようである。

こういう言葉に対する態度から，伝説，儀式の時の賛歌，祈り，あるいは，詩の形をとって，口承文学は生れてきた。特に賛歌や詩は，自然の神聖な要素を称えたり，その特殊な力を願う時に創られた。

第二の特徴は，native American の白人観である。それは白人の native American 観とは極めて対照的である。それを最もよく代弁しているのは Arthur Kopit (1937—) の戯曲 *Indians* (1968) の中で，今迄しばしば Sioux 族の一人として詩に歌われたことがあった Sitting Bull が語る言葉であろう—" ...You will never know what it is to be an Indian...."[6]また，John G. Neihardt が語る *Black Elk Speaks* (1961) は，native American

が白人を語る時の最も憎しみに満ちたものであろう。19世紀後半の白人とのこの闘争の中に Sioux 族の宗教史を読みとることもできよう。技術面では白人たちより劣っていたため白人との闘争に破れ，自由と土地を失った native American の絶望がその中には反映している。まじない師としての Black Elk (1863–1950) は South Dakota の Wounded Knee での数百人の Sioux 族が惨殺されたのを，「その種族のたががこわされた」と語っている：

> I did not know then how much was ended. When I look back now from this high hill of my old age, I can still see the butchered women and children lying heaped and scattered all along the crooked gulch as plain as when I saw them with eyes still young. And I can see that something else died there in the bloody mud, and was buried in the blizzard. A people's dream died there. It was a beautiful dream.
>
> ...the nation's hoop is broken and scattered. There is no center any longer, and the sacred tree is dead.[7]

1890年までには，殆んどの native American は reservation に移され，新しい生活様式に馴れるようになった。その中には Charles Eastman (1858—1939) が語るような，「白人のあとをおって」白人文明の価値を学び，白人と対等になろうとする（"...learn all that is in the books of the white man, so that he [an Indian] may be equal to them [the white men] in the ways of the mind"）[8] が，なんとかして，native American がもっている価値を守りつづけようと決心するものもある。しかし，多くの native American は，Dr. Thomas Whitecloud (1914—1972) のエッセイ "Blue Winds Dancing" にみられるように，白人社会には同化しようとしない態度を持ちつづけた：

> I sit by a fire and think about myself and other young Indians. We just don't see to fit in anywhere—certainly not among the whites....[9]

20世紀後半になると，英語を創作のメディアとする native American の作家が多く出てくるようになった。彼らの小説，詩，ノン・フィクションの特長は，reservation へ送られた頃の native American が 自分たちは白人とは違うのだというやや漠然とした帰属意識しかもっていなかったのとは少し異なり，それぞれの作家が属する部族の固有の文化を維持していながらもそれぞれの伝統を独自の解釈によってとらえなおそうとしていることである。

Creek 族の Durango Mendoza (1945—　　) の "Summer Water and Shirley" (1966) にみるように，超自然的な伝説をテーマにとりあげ，少女に魔法がかけられる短篇小説や， Navajo 族の Grey Cohoe (1944—　　) の "The Promised Visit" (1969) にみるような青年が雷雨の中を自動車を運転して家へ帰る途中に美しい神秘的な若い婦人に出会う短篇小説などでは，伝説に作者の個人的な解釈を加えて，創作をするというところがみられる。

自然を尊敬するのは native American の伝統的な態度であるが，Juanita Platero と Siyowin Miller という二人のNavajo女性による共同作品 "Chee's Daughter" (1948) には， 土地を再生の原動力と考える信仰が扱われているし，本稿でとりあげる N. Scott Momaday (1934—　　) の *House Made of Dawn* (1968) の中で老人が語る思い出のシーンの一つ "The Bear and the Colt" は猟師と獲物の間に自然の絆があることの思い出である。詩では，小説の場合以上に，しばしば，人間と自然との結びつきがテーマとなっている。

現代の native American の文学のもう一つの傾向は， 近年起ってきた政治的・社会的な色彩の濃厚な Red Power Movement と関連していることである。James Welch (1940-　　) やVine Deloria, Jr. (1933-　　) に代表される作品がこれであり，Deloria の *Custer Died for Your Sins* (1969) や *We Talk, You Listen: New Tribes, New Turf* (1970) は特に有名である。Deloria によれば，native American の信念は次のようだと言う：

It is this special pride and dignity, the determination to judge life

> according to one's own values and the unconquerable conviction that the tribes will not die, that has always characterized Indian people....[10]

この "special pride and dignity" は native American の文学にはいつの場合にもみられる要素である。

初期の文学では，個人のアイデンティティはそれが属する部族のメンバーとしてのものという文化的な現象を示していたが，最近では，個人個人のアイデンティティにより中心をおいている。たしかに，個人の属する部族の文化の強い影響は認められるが，最早，一部族に属するという形として現われるよりも，自分たちが最初のアメリカ人であるという意識にもとづいた存在確認である。

以上のような観点から，1969年度の Pulitzer 賞受賞作品である N. Scott Momaday の小説 *House Made of Dawn* を考えてみよう。

III

N. Scott Momaday は Kiowa と Cherokee の血をうけついでいる人で，1934年 Oklahoma 州 Lawton で生れた。芸術家 Al Momaday と作家 Natachee Scott Momaday を父母にもち，少年時代をアメリカ南西部にある Navajo や Apache や Pueblo の reservation ですごした。1958年に New Mexico 州立大学で A. B. をうけ，その後 Stanford 大学で，A. M. (1960) と Ph. D. (1963) をうけた。彼は Ph. D. 論文として，19世紀の詩人・弁護士・科学者 Frederick Goddard Tuckerman の詩を編纂した，これは後に *The Complete Poems of Frederick Goddard Tuckerman* (1965) として出版されたが，その頃より，みずからも詩や短篇小説を発表している。*House Made of Dawn* (1968) の他には，単行本としては，Montana から南部高原地帯への Kiowa 族の移動を描写した散文詩のような *The Way to Rainy Mountain* (1969) がある。1963年より1972年まで，Momaday は

California 大学 Berkeley 校で英文学および比較文学を教えていたが，1972年より Stanford 大学の英文学教授となっている。

IV

House Made of Dawn は，native American が白人とまじわる時に経験する心の問題を扱った小説である。

主人公は Abel という若い native American で，かっては祖父とともに California 州の San Diego から奥に入ったところにある San Ysidro にある Pueblo 部落に住んでいたが，軍隊にとられる。軍隊では，自分が native American であることを意識せずに，白人の世界の中で，白人のように生活していた。しかし，除隊して Pueblo の世界へ戻ってみると，そこが，白人の世界を知った彼には安住できる土地でないことを知る。再び彼は白人の世界へ戻ってみるが，自分が native American であることを意識するようになり，白人の世界にも同化できなくて，苦しむ。Abel は消滅しかけている Pueblo の文化の中にも，白人の文化の中にも自分のアイデンティティを見出せずに苦しむ人間である。さまざまな苦痛を経験した後，再び Pueblo の中へ戻った時，祖父の死を目前にして，Abel は遂に native American としてのアイデンティティを発見する。

この小説は4部から成立っている。第1部は，Abel が除隊して，San Diego の Cañon にある Walatowa という Pueblo 部落へ帰還する場面で，1945年7月20日から8月2日の間を，第2部は Abel が Los Angeles へ戻る場面で，1952年1月26日と27日の2日間，第3部は同じく Los Angelesで，同年2月20日，第4部は Abel が Walatowa へ再び戻るところで，同月27日と28日という時間が設定されている。第1部と第4部は reservation での生活が，第2部と第3部は白人の文明との接触が描かれている。Abel が経験する生活の世界は二つあったわけである。

一つは彼の生れ，育った世界で，祖父の世界である。そこには1年の季節

の移り変りのリズムがあり，自然は厳しいが，その厳しさの中に美しさがある。

> There was a house made of dawn. It was made of pollen and of rain, and the land was very old and everlasting. There were many colors on the hills, and the plain was bright with different-colored clays and sands. Red and blue and spotted horses grazed in the plain, and there was a dark wilderness on the mountains beyond. The land was still and strong. It was beautiful all around. (p. 7)[11]

そこはすべてがリチュアルにつつまれている世界であり，特に Kiva (Pueblo 族の村にある地下室の聖なる場所) はリチュアルの象徴の場である。また peyote という麻薬での興奮もある。

もう一つの世界は，Abel を sex への耽溺と嫌悪とをくりかえさせる刺戟的な白人の世界である。彼は白人の世界では，一時的には平穏に過すことができたが，しばしば暴力的になり，殺人まで犯す。

白人との生活を扱った真中の二つのセクションでは，Abel の物語は連続性を失い，人物やプロットの発展も明瞭ではない。それは，そこでは人間は個人として描かれるよりは，個性のないものとなり，小説の流れそのものもこの native American の悲劇に従的なものとなっているからである。そのためかえって，最初と最後の二つのセクションが非常に想像的に映り，描写された自然が，それも細部にまでわたって描写されている神秘な自然が，読者を引付けることになる。

小説は，Abel が除隊して，San Ysidro の Pueblo の reservation に住んでいる祖父 Francisco のもとへ戻るところから始まる。Native American 特有の長髪をしている祖父は Abel が一番愛している人物であり，San Ysidro へ戻ることは，native American の古くからの生き方，生の哲学の世界へ戻ることを意味している。しかし，Abel は軍隊にいた時は，そういう native American の生活とは関係がなかったし，自分もまったく白人の

ような気持で生きていた。その上，軍隊ではリラックスしていたので，もとの生活に戻ることには恐怖を抱いていた。酒に酔って San Ysidro へ帰えった Abel は，愛する祖父にもなにか抵抗を感じる。父は Navajo であり，Pueblo のものにとってはアウトサイダーであり，Abel も親近感をおぼえない。母は Abel の帰還後，間もなく死ぬ。

Abel は Pueblo の世界へのわれわれの案内役をはたしている。Pueblo の世界は花粉と雨の世界であり，タイトルにあるように，"house made of dawn" の世界であり，神々を慰めるための饗宴とリチュアルの世界であり，大きな谷には不思議さと爽快さがただよっていた：

> ...the great feature of the valley was its size. It was almost too great for the eye to hold, strangely beautiful and full of distance. Such vastness makes for illusion, a kind of illusion that comprehends reality, and where it exists there is always wonder and exhilaration. (p. 20)

メロン，グレープ，スクオッシュのなっているところであり，食用松の実の収穫も数年ごとには多量にあり，Piki, posole, sotobalau などの食べものも豊富で，色も美しく，甘美である。これらはすべて，山にいる鹿と同じように，神の恵みであると考えられていた。(p. 10)

こういう世界の中で，祖父の Francisco は Pueblo の長い，変わらない伝統を象徴する人物である。彼は New Mexico の長い歴史の中で native American の諸部族混在の豊かさをわれわれに示してくれる。San Ysidro には，Jemez という Navajo, Sia, Domingo, Isleta 部族がいるし，その上，古くに東部よりのがれてきた部族で，San Ysidro へ雨乞いの人と鷲の狩猟の名手をもたらした Bahkyush 部族もいる。

メキシコ系の司祭 Father Olguin も，Francisco と同様，伝統の象徴である。Father Olguin は 17世紀のカトリックの司祭が New Mexico でしたように，詩的な Pueblo の人たちを理解しようと努力してきて，今では，

native American が微笑めば，自分も微笑みかえせるほどになっている。しかし，それでも，依然として，Kiva にはなじめない人物である——To be sure, there was the matter of some old and final cleavage, of certain exclusion, the whole and subtle politics of estrangement." (P. 174)

同じような疎遠感は，白人の世界で Pueblo としてのアイデンティティを放棄して，上手く生きてきた Abel にもあった。彼が最初戻ってきた Pueblo の世界は自分の世界ではないように感じる：

> Abel walked into the canyon. His return to the town had been a failure, for all his looking forward. He had tried in the days that followed to speak to his grandfather, but he could not say the things he wanted; he had tried to pray, to sing, to enter into the old rhythm of the tongue, but he was no longer attuned to it. And yet it was there still, like memory, in the reach of his hearing, as if Francisco or his mother or Vidal had spoken out of the past and the words had taken hold of the moment and made it eternal. Had he been able to say it, anything of his own language—even the commonplace formula of greeting "Where are you going"—which had no being beyond sound, no visible substance, would once again have shown him whole to himself; but he was dumb. Not dumb—silence was the older and better part of custom still—but *inarticulate*. (pp. 56–57)

リチュアルと麻薬と自然とが一体となった Pueblo の世界は Abel の苦しみの世界に変わる。そこで，San Ysidro へ真実のようなものを求めて California から来ている白人の女性を Abel は知り，彼女に安らぎを感じはじめる。しかし，彼女との交渉の中で，彼女には Pueblo の倫理とはまったく違った観点にたって作られている白人の法律があることを Abel は知り，すぐ衝突する。そして，彼は Los Angeles の relocation center へ送られる。そ

こでしばらくの間は，Abel は，native American としてでもなく，また白人としてでもなく，なにも属さない人間として，上手くやっていくことができた。Navajo の友人が一人できた。その男はぎらぎら輝く明るい光線の中にいてもなんとも思わないし，足踏み水車の仕事もするし，都会の醜悪さにも平気だし，キャディラックを手に入れようとあくせくする白人とも上手くやっていく男である。Abel はその男と張合う。その結果，Abel は自分が Pueblo であることを意識するが，Pueblo であることもできないし，白人としての意識をもつこともできない自分を発見する。二つの文化の中で生きてきたために，自己が分裂してしまっているのを知るのである。自分のアイデンティティがなにであるかわからなくて苦しみ，なんとかして自己をとりもどそうと苦しむわけである。それは "spilt individual" のディレンマであり，自己を失った人間のディレンマであった。

そういう Abel が，1952年2月に San Ysidro の家へ戻ると，祖父は死の床についている。Abel は6日間，夜明けに，祖父の枕元で彼の声を聞こうと待ちつづける。祖父は昼間は昏睡状態に落入るが，夜明けには意識をとりもどし，Abel を認識する：

> Abel waited, listening. He tried to think of what to do. He wanted earlier, in the dawn, to speak to his grandfather, but he could think of nothing to say. He listened to the feeble voice that rose out of the darkness, and he waited helplessly. His mind was borne upon the dying words, but they carried him nowhere. His own sickness had settled into despair. He had been sick a long time. His eyes burned and his body throbbed and he could not think what to do. The room enclosed him, as it always had, as if the small dark interior, in which this voice and other voices rose and remained forever at the walls, were all of infinity that he had ever known. It was the room in which he was born, in which his

mother and his brother died. Just then, and for moments and hours and days, he had no memory of being outside of it. (pp. 175–176)

Abel は祖父の声に無限の声を聞き，自分が Pueblo 以外の何者でもないというアイデンティティを得る。6日間の夜明ごとの声はだんだんか細くなっていくが，祖父は Pueblo の古い歴史や儀式を語りつづけた。しかし，翌日の夜明け前，目を覚した Abel の前には死んだ祖父が横たわっていた。Abel は Pueblo の儀式にしたがって，死者の頭を持ち上げ，髪の毛に水を注ぐ，長い白髪を紐で結い，体に儀式用の鮮かな色を塗り，死の化粧をほどこす。まだ夜明け前の真暗闇にもかかわらず，Father Olguin の戸をたたき，死んだ祖父をすぐ埋葬してくれるようたのむ。Pueblo をよく知っているはずの Father Olguin は Abel の真意がわからない。Abel は雨の中をただ走りに走る。その時，峡谷や山や空を見ることにより，自己をつかむ。これは白人の文化の中では彼がつかめなかった自分の姿を，自然の中で，Pueblo の文化の中ではじめて，つかめたことなのである。小説の終りは次のようである：

He was alone and running on. All of his being was concentrated in the sheer motion of running on, and he was past caring about the pain. Pure exhaustion laid hold of his mind, and he could see at last without having to think. He could see the canyon and the mountains and the sky. He could see the rain and the river and the fields beyond. He could see the dark hills at dawn. He was running, and under his breath he began to sing. There was no sound, and he had no voice; he had only the words of a song. And he went running on the rise of the song. *House made of pollen, house made of dawn. Ǫtsedaba.* (p. 198)

この啓示が native American であれば，自分の土地で必ず見出せる啓示であるかどうかはわからない。しかし，Abel が見ることができた自然，歌うことができた歌の言葉は，真に帰属できる安らぎの世界に入らなければ，見

ることも歌うこともできないものである。Abel にとっては白人の文化の中での共存はありえなかったし，彼には Pueblo の文化を背負っていくだけしか生きる道はなかったのである。Pueblo の文化は，Abel の中に，論理を越えた神秘な儀式として永久に残るのである。

この小説の語り口は靄におおわれている—— これは Pueblo の伝統の特異性をこえた native American 一般の文化の神秘性を伝えるのに役立っている。白人の文化とは異なった神秘な文化は，明瞭なプロットの中では伝えられないし，ことに Pueblo の神秘性を語る部分は限定された一地域をこえた自然の描写のように読みとれる。祖父が死の床で語る鷲狩りや熊狩りの物語は最も詩的な部分であり，それらは Pueblo だけのものではなく，native American 一般のリチュアルでもある。[12]

V

1968年12月2日号の *The Native Nevadan* 誌に，作者は不詳であるが，"Our Benefactor" と題する「主の祈り」の native American のパロディが掲載されている。それは次のような詩行で終っている：

Lead us not into integration
But deliver us from exploitation.
For thine is the establishment, the power, and the glory.
For as long as the grass shall grow
And the rivers flow and the sun shines.
Forever and ever—unh![13]

この "Lead us not into integration／But deliver us from exploitation" は native American たちの心の声であろうと思う。これは白人によって「美化」されることも，白人文化に自分たちが同化することも拒んでいる native American の声である。彼らは自分たちの文化を自分たちの文化として，守りつづけていこうとしている。

注

1 Native American が「野蛮人」として描かれた例としては，Charles Brockden Brown の *Edgar Huntly, Memoirs of a Sleep-Walker* (1799) や19世紀後半に輩出したいわゆる「西部もの」をあげることができるだろうが，すぐれた文学作品では，どちらかといえば，少ない。特に近年では，この種のものはないと言えよう。

一方，「美化」された native American としては，文学作品に最もしばしば描かれてきたのは，17世紀の Virginia の首長 Powhatan の娘 Pocahontas であった。彼女は「美化」されて「森の中の恋の物語」に登場したり，聖母マリア像として描かれたりする一種の神話の対象とされてきた。そういうものの中で最も有名なのは，James Nelson Barker の戯曲 *The Indian Princess* (1808) であろう。彼女と同類の native American は，詩では，Philip Freneau の "The Indian Burying Ground" (1788), William Cullen Bryant の "The Indian Girl's Lament" (1823), Carl Sandburg のいくつかの作品，Hart Crane の *The Bridge* (1930) にみられる。Longfellow の Hiawatha の物語も「良き」native American の物語であった。

小説では，William Gilmore Simms の *The Yamassee* (1835) や Oliver LaFarge の *Laughing Boy* (1929) などが有名であるが，特に James Fenimore Cooper の "Leather-Stocking Tales" の Natty Bumppo が知る Chingachgook や Uncas などは，滅亡しかける白人に対して，「新しい人間」として位置づけられ，白人がこの「新しい人間」の世界に生きることによって，道が開けることが暗示されている。同種のものとして現われる native American の中に，William Faulkner の "The Bear" (*Go Down, Moses*, 1942) の Sam Fathers を加えることができよう。白人の少年 Ike McCaslin は Sam Fathers から秘伝を学ぶ。また，Ernest Hemingway の "Indian Camp" (*In Our Time*, 1925) や "Ten Indians" (*Men Without Women*, 1927) も，白人の少年 Nick Adams が native American を知ることによって，イニシエイションをうける物語である。ここでは native American は森の中の "serene philosopher" である。

2 アメリカ文学の中で native American がどのように扱われてきたかについては，Leslie A. Fiedler, *The Return of The Vanishing American* (London : Jonathan Cape, 1968) が詳しい。

3 Columbus がアメリカ大陸に到着した当時は，現在のアメリカ合衆国の地域に約100万人の原住民がいたとされているが，現在では，約500部族約80万人が，284か所の reservation を含め，アメリカ各地に住んでいる。(Cf. Alvin M. Josephy, Jr., *The Indian Heritage of America* (Harmonsworth, England : Penguin Books, 1968), pp. 345-362；清水知久『アメリカ・インディアン』(東京：中央公論社，昭和46年)

pp. 35–41.)

人口比率からみれば，Black が約10％（約1900万人），Jewish が約３％（約600万人）に較べると，native American の人口比率はわずか0.5％ほどである。

4 1821年に Sequoyah という Chelokee 族と白人の混血の指導者が発明した Chelokee 語の文字表によるものがあったが，これは例外的なものである。(Cf. 藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』（東京：朝日新聞社，1974年）pp. 142–149) 現在では orthography をもっている部族が多い。(Cf. Wilcomb E. Washburn, *The Indian in America* (New York; Harper & Row, 1975) p. 261.

5 N. Scott Momaday, *House Made of Dawn* (New York : New American Library, 1969), p. 89.

6 Arthur Kopit, *Indians* (New York : Bantam Books, 1967), p. 105.

7 Ouoted in Glorie Levitas, Frank R.Vivelo & Jacqueline J. Vielo, eds., *American Indian Prose and Poetry: We Wait in the Darkness* (New York : G. P. Putnum's Sons, 1974), p. 223.

8 Charles A. Eastman, "On the White Man's Trail," in Natachee Scott Momaday, ed., *American Indian Authors* (Boston : Houghton Mifflin, 1972), p. 58.

9 Thomas S. Whitecloud, "Blue Winds Dancing," in *ibid.*, pp. 64–65.

10 Vine Deloria, Jr., "This Country Was a Lot Better Off When the Indians Were Running It," *The New York Times Magazine*, March 8, 1970.

11 *House Made of Dawn* よりの引用は引用文のあとに頁数を記す。

12 *Ibid.*, pp, 177–188.

13 Ouoted in Shirley Hill Witt and Stan Steiner, eds., *The Way: An Anthology of American Indian Literature* (New York : Vintage Books, 1972), p. 69.

Synopsis

A Note on Native American Literature

——N. Scott Momaday's *House Made of Dawn*——

Tajiro Iwayama

The native American, who entered American literature with the Pocahontas legend, has been depicted in the stereotype either of a savage or a noble savage, with no identity as a native American, in the literature of the white American. Even in some of recent white American literature which sees more positive values in the native American's primitive culture, we find a common undercurrent view that the white culture is superior to the red one, though it needs to adopt or to return to the primitiveness of the native American.

However, the native American in native American literature, which grew out of an oral tradition and has adopted the English language as a creative form of communication since about the middle of the twentieth century, has looked entirely different from the native American in white American literature. Especially the native American in recent native American literature rejects coexistence with the white and maintains his basic culture to seek his own identity, as seen in Sitting Bull's crying out in Arthur Kopit's *Indians* (1969), "...You will never know what it is to be an Indian...."

In native American authors' works are found several characteristics: human existence is closely related to the natural environment, tradition is employed in an original and creative sense, supernatural elements

appear as themes, and, above all, to quote Vine Deloria's words, " special pride and dignity "..." that the tribes will not die " are " the unconquerable conviction." Such characteristics are found in N. Scott Momaday's *The House Made of Dawn,* the 1969 Pulitzer Prize winning novel.

It is the story of the problem of mixing the native American and the white. The first and last sections of the four-part novel present young Abel, a native American, in relation to reservation life while the middle two sections portray him in relation to the white's civilization. Abel had been living in the pueblo of San Ysidro with his grandfather until he was drafted into the army. The novel begins with his first coming back to San Ysidro to resume the ancient ways of his beloved grandfather. Abel's troubles begin at once. After living like a white man, quite assimilated while in the army, he has to live as a rootless native American unable to find himself among the vestiges of his dying culture. So he seeks a new place to live somewhere else. But his new contacts with the world often erupt into violence and goad " him into a compulsive cycle of sexual exploits, dissipation, and disgust." Thus, he feels strange in the two worlds of the white and the native American. However, when he comes home again in time to carry on tradition for his dying grandfather, he sees the reality in the mysteries of his native culture of " pollen and rain," of " house made of dawn," of feasts and rituals to placate the gods, " of wonder and exhilarating vastness," and find his identity as a Pueblo in the dawn.

The novel is strong in imaginative imagery and evocation of the natural world, and is full of haze. So, the characters seem ethereal and the plot line is subordinate to the theme of the struggle for an identity.